

私の戦争体験

弓納持 美世子（昭和2年生まれ）

満州ハルピン市に14歳頃から家族で明るく豊かで幸せな生活を願って暮らしていました。大東亜戦争が勃発して、私たちの生活は一変しました。私たちは、学徒動員で満州第8372部隊久須美隊航空隊に配属され、菊水特攻隊の若き兵士が白いマフラーをなびかせて戻る燃料のない単機で飛び立って行く姿を、溢れる涙で肩がちぎれる程手を振って機影が見えなくなるまで見送りました。

祖国の勝利を信じて願って、くる日もくる日も見送りましたが8月15日悲しい中で終戦を迎えました。

悲しんでいる間もなく、ロシアの軍師が飛行場に現れ、日本兵士は武装解除となりロシア兵士も恐ろしい姿で入ってきました。その姿を見た平形伍長は、私たち女子を集めました。『これからは絶対泣いてはならぬ』ときつい事を言いながら、バリカンとカミソリで大切な黒髪や眉を剃り落として男装にさせられて、他の兵士のいる集会場に行くように言われました。そこで私は、手榴弾と青酸カリのどちらかを選ぶように言われ青酸カリを選び、いざ使わなければならない時まではとポケットに隠しました。

兵士達はソ連北満の捕虜となり、婦女子・年寄り・子供は、収容所に連れて行かれ、動ける者は夜明けから深夜まで働かされました。その間小さな子供達は、不安と空腹を抱えながら私たちの帰りを待っていました。お互いの姿を確認し、与えられた僅かな芋を口にするとホッとして幸せでした。夜、横になると屋根の隙間から星空が覗き、この空は祖国日本に繋がっているのだと涙が止まりませんでした。遠い祖国には必ず帰りたいと思っても、いつ胸にしまっている青酸カリを飲むことになるのかと言葉にならない涙が溢れて、目がさえ眠れない日が続きました。

再びハルピン市に帰される事になり、雨の中、3~4日昼夜休む事は許されず夢遊病者のように歩き続け、気が付くと家族もバラバラになってしまい、しっかり手を握っていたはずの妹と弟がいません。母と二人でキチガイのように泣き叫びながら探し回りました。路地の隅にうずくまっている妹と弟を見つけた時の喜びは、言いようがありません。ただただ抱き合って大声で泣きました。

あの時2人を探せなかったら、死んでいたか、残留孤児となって二度と会えずにいたことでしょう。今考えてもゾッとします。

この行軍で悲しい情景を沢山見ました。生まれたばかりの赤ちゃんを殺すこともできず、また置き去りにもできず、おぶって歩き続けて、背中で死んでいても気づかず歩き続けてというお母さんがいたり、年老いた両親を捨てられず子供に薬を飲ませて殺した後、両親を背負って歩き出したご夫婦がいたり、家族がバラバラになって泣き叫びながら探し合う人がいたり、どの人もその後出会う事はありませんでした。

ハルピンにようやく着いて新しい生活が始まりました。姉夫婦も同居し8人家族となり、一生

懸命働いて祖国日本に帰ろうとやれる事は何でもやりました。たばこ売り・靴磨き・女中など夢中で働きました。食事も1日1食だったり、2食だったり、とにかく日本に帰る旅費を貯めました。そんな中で大切な大切なお金を盗まれてしまいました。もう神も仏も私たちを見放されたかと落胆し、日本には帰れないのかと諦める他ありませんでした。悔しい悲しい暗い日が続きましたが、それ以上の悲しみが襲って来ました。可愛い盛りの姉の子供が病気になり、医師もなく薬もなく死んでしまいました。縁の下の板を剥ぐって箱を作って、満人に頼んで埋めてもらいました。日本に連れて帰れず身の裂かれるような悲しみは、忘れる事はありません。

いよいよ日本に帰れる事になりましたが、旅費がなく売れる物はすべてお金に変えて、ハルピンを出発しました。コロ島に近づくと真っ青な海・真っ白い波・心地よい潮風に吹かれて初めて本当に日本に帰れるんだと実感し、バンザイバンザイを大声で叫びながら抱き合いました。港には引き上げ船が待っていました。ふっと見ると私たちのお金を盗んだ人がいるではありませんか。私たちの他にも盗みをはたらいていたので、みんなに袋叩きにあい船に乗船させてもらえませんでした。船が港から離れてみると、泣き崩れているその人に今までの憎しみが消え、いつか必ず祖国に帰れますようにと神仏に祈っていました。同じ苦しみを味わった日本人同士という思いだったのだらうと思います。

引き上げ船に子供が一人乗船しました。姉の子供です。とっても珍しいというので船中の人喜んでくれ、お風呂や赤飯を炊いて祝ってくれました。満州に子供を置いて来た人、亡くした人の色々な思いの中でのお祝いでした。

遠く祖国の大地が見えてきました。甲板に駆け寄って無言のまま喜びを噛みしめていました。涙でぐちゃぐちゃです。やっと帰れた佐世保港に接岸するやいなや飛び下り、しっかり大地を踏み、飛び跳ねて祖国の匂いを嗅ぎ、帰国の喜びを噛みしめました。

その喜びも束の間、目の前をアメリカ兵と腕を組んで歩くパンパン娘がいました。信じられない光景でした。祖国のために男装になってまで戦ってきたのにと変わり果てた日本を見て悲しさで一杯になりました。

気を取り直して考えてみれば、病気にもならず、健康で無事帰国できたことは、神仏のお陰、両親のお陰、周りの人たちのお陰に他ありません。心から深く深く感謝いたします。

この貴重な体験を活かして、どんなに辛いことがあってもあの頃に比べればまだまだと思って頑張っていました。ハルピンで軍人だった主人と知り合いましたが、お互い明日をも知れぬ日々を送り、宮古島で終戦を迎えた主人が、郷里の新潟に帰ったのが1年半後。今のように連絡もとれないので、お互いが生きて再会することを祈りながらも諦めてもいました。でも運命の赤い糸が切れることはありませんでした。結婚することが出来ました。最高に幸せでした。20歳の時でした。3人の子供に恵まれ幸せな人生を送らせていただき、今では孫が7人いて曾孫の顔も5月に見ることができます。80歳になった私がお産の介護の手伝いをしてあげられる程元気でのうは、本当に有難い事です。

なにとはともあれ、戦争は人の心を変え人生を変えてしまいます。戦争は二度とあってはなりま

せん。今まだ戦争をしている世界の国に伝えたい。戦争から幸せは生まれません。

私は生きている限り世界に平和が訪れますよう心から祈り、戦争の酷さ^{ひど}悲しさを伝えてまいります。

今は天国にいる主人もそんな私を応援してくれていると思っています。